

第3章

目指すべき将来像と 戦略の方向性

～自然と共生した社会の実現のために～

- 1 目指すべき将来像
- 2 目標期間
- 3 基本目標
- 4 2030年目標（今回の見直しの趣旨）

1 目指すべき将来像

私たちは、生きていく上で必要な空気や水はもとより、食料、衣料、医薬品、そして様々な製品の材料、さらに気温の調整や自然災害の軽減など暮らしの快適性と安全性についても生物多様性の恩恵を受けています。

私たちの暮らしを将来にわたって安全かつ豊かで快適なものにするためには、生物多様性に配慮し、環境負荷が小さく、豊かな暮らしを可能にする経済・社会システムを備えた都市へと変化していくことが求められます。そこで、本戦略の目指すべき将来像を本市の自然環境の中で培われてきた生物多様性を保全し、将来にわたって生物多様性の恩恵を享受できる環境共生都市の実現を目指すこととし、次のように掲げます。

「多様な自然と豊かな暮らしが 次世代へと引き継がれる環境共生都市・岡崎」

2 目標期間

目指すべき将来像は、生物多様性の保全及び持続可能な利用によって実現を目指す本市の姿であり、広く市民に認知されることにより、50年、100年をかけた環境の再生により、また100年、200年をかけた持続可能な利用により、世代を継いでその実現を目指すものです。

本戦略では、市民と自然とが共生する社会の基盤づくりに要する期間を勘案し、目標期間を2050年とします。



3 基本目標

目指すべき将来像の実現に向け、今後の取組みにおいて中心に据えて推進を図るものを、取組みの基本目標とし、次の3つを掲げます。

多様な自然

基本目標1 本市在来の生物多様性の保全と再生

本市の風土によって培われてきた地域固有の自然環境(森林、緑地、河川、湿地など)に応じた動植物や生態系の保全と再生を目指します。

豊かな暮らし

基本目標2 生物多様性の恩恵を持続可能な形で享受できる社会の実現

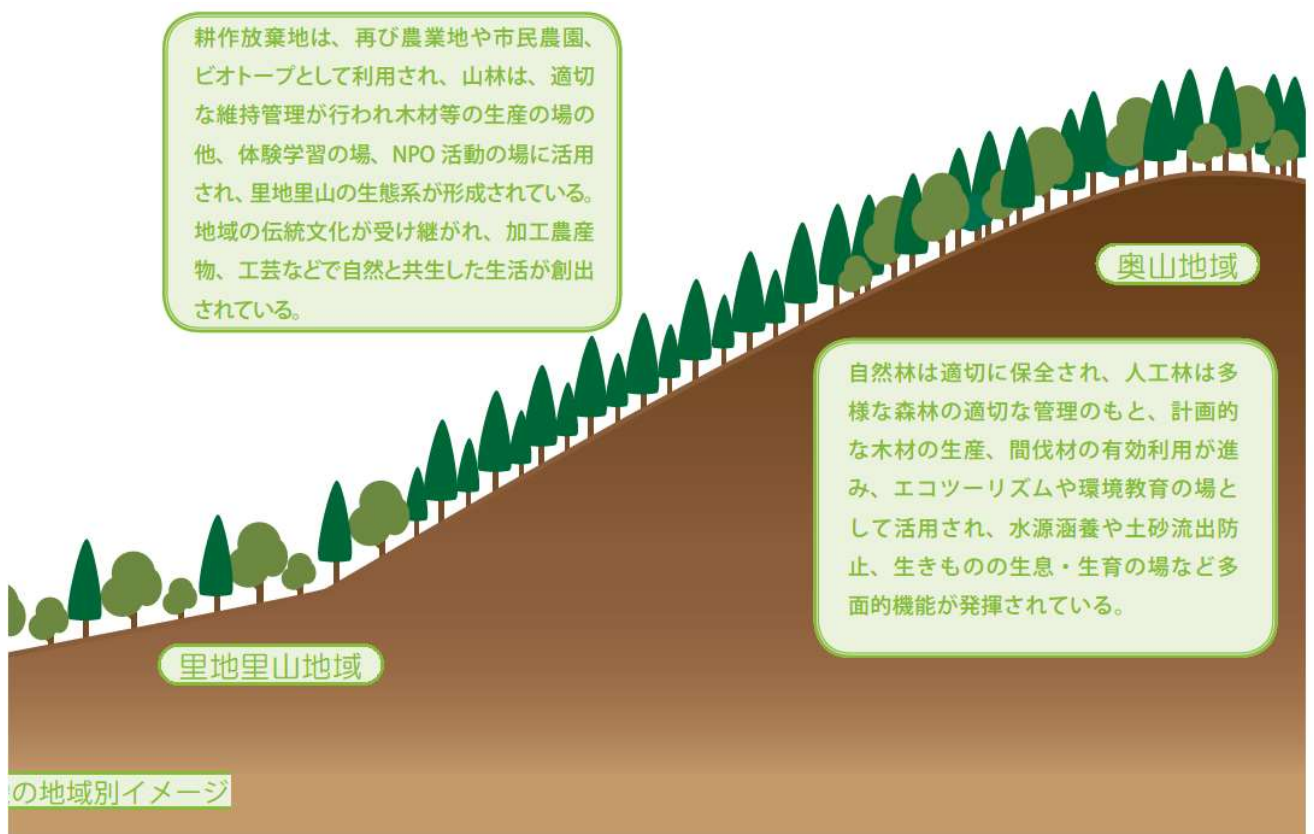
私たちの暮らしや産業活動は、自然資源に深く依存しています。このため、農林水産業や製造業などすべての産業活動において生物多様性に配慮し、その恵みを将来の世代にわたって利用できる、豊かな暮らしを目指します。

次世代への継承

基本目標3 将来にわたり学び、考え、共に支え合い行動する岡崎文化の環の醸成

生物多様性の保全と持続可能な利用に向けて、環境学習の推進、ライフスタイルの転換、自然環境や野生動植物の保全活動などの取組みを進めることにより、生物多様性の重要性を社会に広く浸透・定着させ、市民、事業者、行政等が、それぞれの役割を踏まえつつ協力・協働して取り組む基盤づくりを進めます。

「岡崎文化の環の醸成」とは、学び、考え共に支え合う市民文化をめぐらし作り出していくこと意味しています。

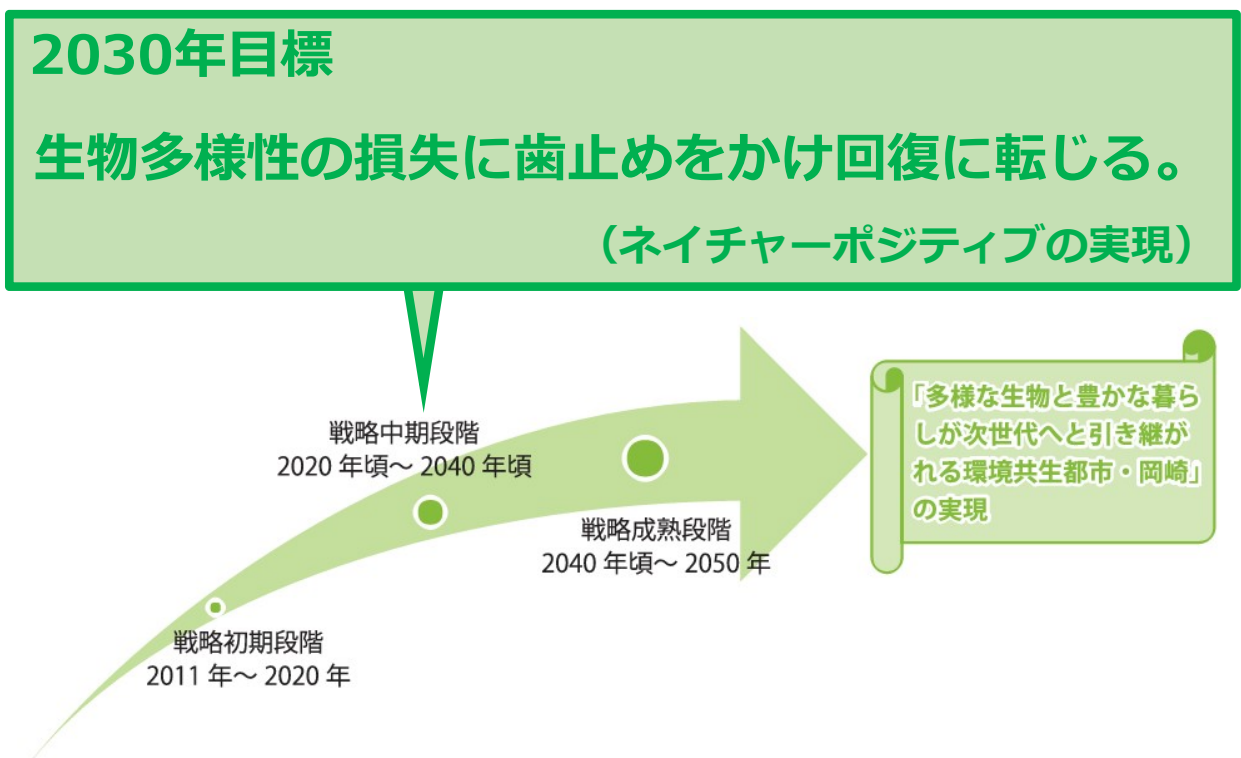


4 2030年目標（今回の見直しの趣旨）

今回の見直しでは、目指すべき将来像や基本目標は引き続き継承します。

市民アンケートの結果では、10年前より自然が減少したと答える市民が60%であるのに対し、10年前より自然が豊かになったと答える市民はたった1%でした。

国際的評価では、現状のままでは生物多様性の損失は止まらなるとされており、回復に転じ自然との共生を目指すには、生物多様性の保全のみではなく、経済、社会、政治、技術全てにおける社会変革(トランスフォーマティブ・チェンジ)が必要であるとされました。そこで、目指すべき将来像を達成するためのマイルストーンとして、2030年までに次の目標を掲げます。



これまでの生物多様性の損失に対する直接要因(4つの危機)への施策も引き続き推進するとともに、間接要因に関しては本市の他政策との連携を強化し、自発的な行動変容を促す仕掛け「ナッジ」(ナッジ=ひじで軽くつつく)を施策に取り入れるなど、社会変革を促します。さらに、30by30など新たな国際目標等も施策に反映させ、取組みを実施していきます。

また、戦略初期段階の2020年を迎え、初期段階の取組みを評価するに当たり、取組みの重複や羅列により、進捗管理が行いにくいことが分かりました。そこで、これまでの8つの行動戦略と26の具体的施策、リーディングプロジェクトについて、現状に即し、体系及び施策の見直しを行います。さらに数値目標を、進捗が計れるように、具体的施策に対応した2030年までの取組目標に変更することとします。